

現代短歌分類辭典

新裝判
6 卷

津
端
亨
編
纂

江苏工业学院图书馆
藏书章

現代短歌分類辞典

新装版 6 卷

通卷 1 6 4

昭和六十三年三月十一日発行

定価一四、〇〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒345

埼玉県北葛飾郡杉戸町宮前一九六一五

電話(〇四八〇) 三八—〇〇四〇番

振替 東京三一九三一四

こ(木)	四五六	一	こあじ(小味)	三	一四	歌数	二八五	頁数
こ(個)	一六三	六	こあじ(小鱈)	四	一四	歌数	二八五	頁数
こ(此)	二〇四	三	こあじろ(小網代)	七	一四	歌数	二八五	頁数
こ(期)	二〇四	三	こあゆ(小鮎)	六	一四	歌数	二八五	頁数
こ(籠)	二〇四	三	こ(子)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こ(茸)	二〇四	三	こ(児)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こ(蚕)	二〇四	三	こい(来い・来ひ)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こ(粉)	二〇四	三	こい(濃い・濃ひ)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こ(孤)	二〇四	三	こい(故意)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こ(孤)	二〇四	三	こい(恋)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こ(是)	二〇四	三	こい(鯉)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こ(濃)	二〇四	三	こい(こひ・恋ひ)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こ(基・棋・囲碁)	二〇四	三	こい(こひ・恋ひ)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーかさす(コーカサス・地名)	二〇四	三	こいあおぐ(恋ひ仰ぐ・恋い仰ぐ)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーくす(コークス)	二〇四	三	こいあるく(乞ひ歩く・乞ひ歩く)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーす(コース)	二〇四	三	こいけ(こひけ・鯉池)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーち(コーチ)	二〇四	三	こいうた(恋歌・こいうた)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーと(コート)	二〇四	三	こいうらないし(恋占ひし)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーと(コート)	二〇四	三	こいえ(こいへ・小家)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーど(コード)	二〇四	三	こいおもいおり(恋い思いおり)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーなー(コーナー)	二〇四	三	こいおる(恋ひをる・恋いおる)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーひー(コーヒー・珈琲)	二〇四	三	こいおれば(恋いおれば)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーひーちゃん(コーヒー茶碗・珈琲茶碗)	二〇四	三	こいが(古伊賀)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーらす(コーラス)	二〇四	三	こいがたき(恋敵・恋仇・こひがたき)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーるど(コールド)	二〇四	三	こいがたり(こひがたり・恋語り)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーお(こあを・濃青)	二〇四	三	こいきて(こひきて・恋ひ来て・恋い来て)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーおき(こあをき・濃青き)	二〇四	三	こいくれない(濃い紅)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーおく(こあをく・濃青く)	二〇四	三	こいぐさ(恋草・こひぐさ)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーおぐも(こあをぐも・濃青雲)	二〇四	三	こいぐち(鯉口・こひぐち)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーおなる(こあをなる・濃青なる)	二〇四	三	こいけむら(小池村)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーおさ(こあをさ・濃青さ)	二〇四	三	こいこいし(恋ひ恋ひし)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーおば(こあをば・濃青葉)	二〇四	三	こいこいて(恋ひ恋ひて)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーきうど(小商人)	二〇四	三	こいごころ(恋心)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーきつ(小蜻蛉)	二〇四	三	こいざめ(恋醒め)	九	一四	歌数	二八五	頁数
こーあぎ(小字)	二〇四	三		九	一四	歌数	二八五	頁数

こうぞくぶたい〔後続部隊〕	五	四〇	こうでい〔拘泥〕	三	四六	こうびき〔交尾期〕	三	四八
こうたい〔交代・交替〕	二	四〇	こうとう〔光頭〕	三	四六	こうびしゃ〔後尾車〕	二	四九
こうたいす〔交代す・交替す〕	三	四〇	こうとう〔口答〕	一〇	四六	こうびつうか〔後尾通過〕	二	四九
こうたいす〔後退す〕	二	四〇	こうとう〔口頭〕	四	四六	こうびとう〔後尾灯〕	四	四九
こうたいする〔後退する〕	三	四〇	こうとう〔紅灯〕	三	四七	こうびよう〔孔廟〕	五	四九
こうたく〔光沢〕	四九	四〇	こうとうしゅう〔こうとうしふ・紅灯集〕	二	四七	こうふ〔坑夫〕	二〇	四九
こうだい〔広大・宏大〕	五	四二	こうど〔荒土〕	九	四七	こうふ〔工夫〕	二〇	四九
こうだいな〔広大な・宏大な〕	三	四二	こうどう〔公道〕	三	四七	こうふう〔劫風〕	二	四九
こうだいな〔広大なる・宏大なる〕	四	四二	こうどう〔坑道〕	三	四七	こうふう〔工夫〕	二	四九
こうだんな〔公団〕	三	四二	こうどう〔行動〕	二	四七	こうふう〔工夫小屋〕	二	四九
こうち〔巧緻〕	四	四二	こうどう〔講堂〕	三	四六	こうふく〔口腹〕	二	四九
こうちな〔巧緻な〕	四	四二	こうどく〔講読〕	三	四六	こうふく〔幸福〕	二	四九
こうち〔耕地〕	一九	四三	こうない〔構内〕	八	四九	こうふく〔幸福〕	二	四九
こうち〔高地〕	二	四三	こうにゅう〔購入〕	三	四九	こうふよう〔紅芙蓉〕	二	四九
こうちしよ〔拘置所〕	五	四三	こうにん〔後任〕	三	四九	こうふら〔工夫ら・工夫等〕	二	四九
こうちや〔紅茶〕	五	四三	こうねつ〔高熱〕	六	四〇	こうふん〔興奮〕	五〇	四九
こうちよう〔好調〕	三	四三	こうねんき〔更年期〕	八	四〇	こうふん〔口吻〕	五〇	四九
こうちよう〔紅潮〕	五	四三	こうのす〔鴻の巣〕	三	四〇	こうふんして〔興奮して〕	六	四九
こうちよう〔高潮〕	二	四三	こうのとりの〔鶴〕	四	四〇	こうふんしをり〔興奮しをり〕	六	四九
こうちん〔工賃〕	七	四三	こうのもの〔香の物〕	一〇	四〇	こうふんす〔興奮す〕	二	四九
こうつう〔交通〕	八	四四	こうは〔光波〕	八	四〇	こうふんする〔興奮する〕	二	四九
こうつうか〔交通禍〕	三	四四	こうはい〔興廃〕	二	四〇	こうふんせる〔興奮せる〕	二	四九
こうつうけいかん〔交通警官〕	三	四四	こうはい〔後背〕	五	四〇	こうふんせし〔興奮せし〕	二	四九
こうつうせいり〔交通整理〕	二	四四	こうはい〔後輩〕	七	四一	こうぶんせし〔興奮せし〕	二	四九
こうつうぜねすと〔交通ゼネスト〕	二	四四	こうはい〔荒廃〕	二	四一	こうぶんせる〔興奮せる〕	二	四九
こうつうせん〔交通線〕	二	四四	こうはく〔紅白〕	二	四一	こうぶんどろ〔弘文洞〕	八	四九
こうつうじこ〔交通事故〕	八	四四	こうはつ〔紅髪〕	三	四一	こうへい〔公平〕	三	四九
こうつうじゅんさ〔交通巡査〕	四	四四	こうはん〔後半〕	二	四一	こうへい〔工兵〕	三	四九
こうつうていし〔交通停止〕	二	四四	こうはん〔公判〕	七	四一	こうへく〔恋ふべく・恋うべく〕	六	四九
こうてい〔後庭〕	六	四四	こうはい〔勾配〕	七	四一	こうほう〔後方〕	二	四九
こうてい〔公定〕	四	四四	こうはいしんり〔紅梅〕	三九	四三	こうほうぶたい〔後方部隊〕	二	四九
こうてい〔功程〕	二	四四	こうはいしや〔購買心理〕	二	四三	こうほう〔興亡〕	三	四九
こうてい〔工程〕	九	四四	こうはいしや〔購買者〕	二	四三	こうほう〔工房〕	三	四九
こうてい〔校庭〕	五	四四	こうばいりよく〔購買力〕	二	四三	こうほうごや〔弘法小屋〕	三	四九
こうてい〔肯定〕	二	四五	こうばまち〔工場街・工場町〕	三	四六	こうほうし〔興亡史〕	二	四九
こうてい〔行程〕	三	四六	こうばみち〔工場道〕	二	四六	こうほうじ〔弘法寺〕	二	四九
こうてい〔高低〕	一	四六	こうばむら〔工場村〕	二	四六	こうほうじよう〔弘法場〕	二	四九
こうてい〔高弟〕	三	四六	こうばん〔交番〕	二	四六	こうほうむぎ〔弘法麦・弘法麥〕	二	四九
こうてつ〔更迭〕	七	四六	こうひ〔工費〕	二	四六	こうほうひえ〔弘法稗〕	二	四九
こうてん〔荒天〕	七	四六	こうび〔交尾〕	八	四六	こうま〔小馬〕	一	四九
						こうみ〔濃膿〕	二	四九

こうむてん〔工務店〕	二	四七
こうむる〔被る〕	三	四七
こうめ〔小梅〕	三	四七
こうもう〔紅毛〕	二	四七
こうよう〔こうえふ・紅葉〕	一三〇六	四七
こうらす〔コーラス〕	八	四六
こうらむ〔凍らむ〕	三	四六
こうりしょうにん〔小売商人〕	二	四六
こうりんご〔紅林檎〕	三	四六
こうろん〔口論〕	二	四六
こうんかく〔孤雲閣〕	二〇	四六
こえ〔越え〕	二五	四六
こえけむ〔越えけむ〕	二	四七
こえけり〔越えけり〕	九	四七
こえたり〔越えたり〕	二	四七
こえたり〔越えたり〕	三	四七
こえたる〔越えたる〕	三	四七
こえつつ〔越えつつ〕	三	四七
こえ〔肥〕	三	四七
こえ〔声〕	三	四七

【名詞】(木)

き(木)の古形。複合語として残っている。
木陰、木立、木枯、木肌、木叢、木の下、木の下路、木下陰、木の葉、木の間、
木群、木末、木がくれ下、木がくれ道、木深かし、木洩れ日、木の花等は、各順を
追って目次を作り、後述し、用例を並べる。

あゝ黒う木立々々はそのまゝに胸に残りて霧こめにけり①	近藤 元
相ならび古歌誦せし人ゆゑに春日木立の路をわすれず⑦(現代短歌大系)	與謝野 寛
逢坂山越えにけらしも吹きあげて木群さわぐは冬湖の風①	鈴江 幸太郎
あかしやの青葉もしほる油照り木かげの馬子の昼寝ひさしき①	野沢 柿葺
青桐の木立のしたの湿地にあきひとどかず雀きてゐる②	和田 山蘭
仰ぎ見る空の色さへ澄みはてて木枯の風吹きにけるかも①	土田 耕平
青くなりし木立をゆけば留学生らしき思ひの毫しもあらぬ④	斎藤 茂吉
青苔に染みうつくし斑照りこの木洩れ日の幾時あらむ	北原 白秋
蒼苔のしみ生ふる庭木洩れ日のうぐけはひに苔ひかり増す(石階)	片山 新一郎
蒼白く月はいできぬ木枯の山際明りまだあせなく⑥	太田 穂
青谷の木叢がくり二りん咲く山しやくやく花の白珠⑭	松村 英一
青谿の木響にとよむ人のこゑ兵おくり来て旗ふりやめず①	伊藤 嘉夫
青葉山かく明るくて君逝きしか仰ぐ木ぬれの藤波の花①	鈴江 幸太郎
青みつつ磯の木間に梨咲きぬ潮の花とも見ゆる冷たき⑭	與謝野 寛
青麦の穂立ちの上の松山の木の間どもしからずの子が鳴く①	清水 比庵
青柳の木かげの道をゆく人も五月は物のうつくしきかな(銀の鞭)	佐佐木 信綱
青山と杉の木立に囲まれしひとさひら壺け温泉の香ただよふ②	杉田 鶴子
青山に木深き陰はひろがりぬ風落ちて日も傾けるらし(新萬葉集七)	曾谷 石上磨
青山の傾斜にならぶ赤松の木肌秋待つ色とぞにほふ④	谷 鼎
あかあかとすすきの風の武蔵野の入日に走る木がらしの汽車	工藤 静歌
あかあかと松の木の間に日は燦る小天竺の夏のあけぼの	内ヶ崎 作三郎
あか井くむふもとの道はうづもれぬ御堂やいかに木枯の風	大和田 建樹
紅き青き新芽にふきてむきむきの木末あかるき庭寿となれり(私燭)	臼井 大翼
赤き岩赤き土赤き砂の流れ家より低き木群も寂し①	小暮 政次
赤き柿古りし木立に満ちて照るわが食みうるはその幾つぞも②③	窪田 空穂
赤城なる冬の木立がやがて被む雪を思ひて心地よしわれ⑮	與謝野 晶子
アカシアの岸の木立の疏らなり土濁りしつツナイルは流る	朝吹 磯子
あかしあの繁りて暗き木蔭より水走り来る白く光りつツ⑧	窪田 空穂
あかしやの木ぬれに白き月はあり霧ふかくして花のにほひす	大河内 由芙
アカシアの木立に道は入り来たりアカシアといふはやさしき木かな①	堀内 通孝
あかしやの木立をすきて漢江のながれあかるく波立てるみゆ②	市山 盛雄
アカシアの木群の隙に透く海のただに真青し逝きし日のごと③	佐野 四郎

アカシアの花の散るかな男らが壁の泥塗る青き木蔭に	西村 一平
アカシアと花の木かげに海ひかりおぼる月夜と見ゆる路かな⑫	與謝野 寛
あかつきの雲白々と近く飛ぶ木立のもとに草たばねおく	並木 茂樹
あかつきの木かげに立てるよき人の袖ひるがへし風の吹く見ゆ	久保島 紫村
あかつきの杉の木立の中を行く御裳裾川の春の水おと	與謝野 晶子
あかつきの光はつかに差しそめし木立が梢に夜の鳥ぞ啼く	斎藤 茂吉
暁の窓に木立の見え初めてちいさい蟬が啼き出でにけり	中井 コツフ
あかつきの木立の露にそぼぬれてはるかに匂ふ朝の海みる①	百田 楓花
茜刺すまひるの木ぬれいきれだち一群の鳥入りて声なし④	今井 邦子
茜さすまひるの木ぬれ照りきらめき小鳥は暑き空に入りけり⑪	今井 邦子
赤松の木立まばらなる寺院に金堂たてるふかしづもり	藤森 朋夫
赤松の木群しづけきこの宮椎の若葉の時いたりけり	北原 白秋
赤松の木立がくり家に三五みのり田も見ゆ山の上より③	北原 白秋
赤松の木立枝ぶり写しあるひとりごころに今日もなぐさむ	岡本 大無
赤松の木影れつつ師の歌碑にほろぼる時に松葉こぼしぬ	藤沢 古実
赤松の林を透きて光沁む木下は清し黄なる山砂③	上野 幸子
赤松の木立に透る夕づく日くれなんとし光としも(馬鈴薯の花)	佐野 四郎
赤門を入りて広き庭ありき覆ひしは何の木かげなりしや①	島木 赤彦
あからひく夕日に映えて和ぐ海に木むら小暗しをちこちの島①	上代 皓三
あからみの見え来ぬ木梢桜木の多生ふる山の残れる古さ⑧	鹿兒島 壽藏
灯ひとつ木の間をもれて大宮の松ふくかぜは秋の風かも(地機)	高田 浪吉
あかるくも日の照る坂を下るなり木がらしの音うしろに聞ゆ	橋田 東声
明るくも山の木間の奥ふかく見えたりたる草の色かな⑭	佐野 翠坡
明るくも夕日照りける壕の土手松の木下はまつろきかも①	與謝野 寛
明るみて時雨降るとき向山の松の木末に鳥あつまりぬ	中村 美穂
阿寒湖の島の木立に蟬のこゑ聞こえつつ居るときどき中絶ゆ⑨	竹山 茂樹
秋浅き木の下道を少女らはおほむねかるく靴ふみ来るも	斎藤 茂吉
秋青き木末にさがる蓑虫のわがなりゆきは天のまにまに④	中村 憲吉
秋いまだ暑さをのこす片山の木群がなかに鳴く蟬のあり④	岡野 直七郎
秋風は木の間に流る一しきり桔梗色してやがて暮るる雲	太田 水穂
秋風や厚織物のごとくなる木末より落つ白楊の葉は	若山 牧水
秋風ふく木群の中に幹ぼその白樺の木をあはれと見るかな⑫	與謝野 晶子
秋草の花の目につく木群がもと暮れつつのぼる赤名峠に①	金子 薫園
秋木立遠く入りては物の音のありやと思ひたらずみて待つ②	鈴江 幸太郎
秋雨の薄雲低く迫り来る木群がなかや中の大兄すめら	窪田 空穂
	長塚 節

秋雨に冷ゆる木立の黒々と闇夜ながらに空は見えつつ①
 秋さりていよま青き竹柏たけのくさきの木の下行きつつめたき朝かも
 秋されば松の木下のしめり苔雀こけすずめが一羽おりてあされり（庭音）
 秋高き楨たけの木ずゑに月すみて鳥の羽ばたくおときこゆなり
 秋たけし木立が中にあらはれし柚ゆずの実のいろぞさびしかりける②
 秋たてば街のはづれの櫓うしの木立に行きてよくものをおもふ③
 秋ちかき月夜の空に声ほそく五位鶯啼ういごげばそよぐ木々の葉
 秋づきし木木の梢に吹きとよむ風の朝を鳴く蟬はなし①
 秋づける山脈明し白樺の木立は遠く眼にとまるなり
 秋の雨遠き旅路を行くがごと木きの葉ならして足柄あしなすぐる①
 秋の雨ふるべくなりて寂しさは早に枯れし木の葉散り落つ①
 秋の水小諸の城の木立より鳥の渡る川辺村かな②⑧
 秋の風いちようなの木きの葉を落し、通りぬけていくわたしも走る
 秋の風木立にすさぶ木のなかの家の灯かげにわが脈はうつ③
 秋の気のすみたるなかに木の葉みないとかなしげにうちそよぐなり
 秋の木の実すがしきなかに色ふりしパパヤは場ちがひといふ哀れさを
 感ず③
 秋の霜しも一度下りしこの台の青桐の木立皆黄となりぬ⑬
 秋の月庭の木立にさしわたりみみずさへ夜半を鳴き出でにけり①
 秋の昼甘しと身さへ慄おそふべき木の実の欲しとふと思ふかな
 秋の日のこがねにほへる遠木立そこにか母のありかたづねむ①
 秋の光しづかにさしてこの家の櫓うしの木立の奥深く見ゆ⑭
 秋の日の寂しかりしに木の葉などいまも貯ふ水ぎはのうろ①
 秋の日の山のはざまの木がくれに人ゐて山の薯いもを掘るなり（新萬葉集七）
 秋の日の暮れ早みかも船ゆ見る山も木立も色とどまらず④
 秋の日は空木うつぎの梢のかへり花あかきに照らひまぶしかりけり②
 秋の昼甘しと身さえと慄おそふべき木の実の欲しとふと思ふかな⑫
 秋の日照れる重みにたへぬごと光りちりゆく木の葉と木の葉②
 秋の陽は木の間を洩れて庭に落つ山門めざして歩む足どり（鴻）
 秋の実の木ずゑ離るごとくにも親はなれゆく子等をしぞ思ふ⑧
 秋の山觸れてこぼる葉もあらん深き木蔭に入らんで歩まん①
 秋の夜の摂心にいそぐ峽の道わがあしおとは木霊しにける③
 秋の夜を山路下れば山の庵の窓のとし火木の間より見ゆ
 秋は朝せせらぐ溪の音澄みて岩に漂ふ白き木洩陽（多磨三）
 秋はやく木の実の落つる親しさをもちて来にけり榎の樹のもと
 秋はやく庭の木末に小鳥きて寂々とありこゑにも鳴かず

初井 しづ枝 神原 克重 岡合 玉堂 川治 天皇 明治 天皇 若山 牧水 四賀 光子 寺沢 亮 森二 郎 松村 英一 初井 しづ枝 與謝野 晶子 中村 盛重 若山 牧水 近藤 元 竹尾 忠吉 窪田 空穂 三苦 京子 與謝野 晶子 茅野 雅子 窪田 空穂 中城 ふみ子 松本 俊男 矢沢 孝子 立岩 孝子 與謝野 晶子 豊島 逸水 武田 文麿 土屋 文明 近江 満子 木俣 修 奥島 欣人 中島 海鷗 山口 茂吉 北見 志保子

秋はよし簷に木の実の盛らると軒まで霧のくだり来ぬと
 秋晴るる麓の木原昼闌けて赤啄あかひつ木鳥ならむ音のかそけき
 秋晴れば続かずやがて疊りつつかかる日頃に木の葉いろづく
 秋ばれの原だ立木だしみじみと仰げばひかる空もわが身も①
 秋晴に木の葉ちりしくこの街に生きて楽しき乞食らのむれ①
 秋日照る和布刈の宮にわが来れば木の葉散りつつ潮風さむし①
 秋深き山の木の実に飽きたらむ鮒ふな出て来て庭鳥を襲ふ
 秋ふかき木群こもぐらが上の空を載り新議事堂は白くおちつく②（現代短歌全集・現代短歌大系）

秋ふかき岨さきの木かげの山の井を大き柄杓に汲みて飲みたり
 秋ふかく木がらしに似る風吹けばはやくも瘦する加茂川の水④
 秋深き山の氣の冷え見にしみて時に背に射す木洩れ日に佇つ③
 秋ふけてあらはになりし赤松の木立のなかにつかつかと入る
 秋ふけて咲く風むなし街跡の枝ももしき焼木立かな
 秋真昼青きひかりにただよへる木立がくれの家に雲見る③
 秋もはや目にたつほどに庵あとに木の葉散りくるせはしげにして②
 秋山あきやまの木かげ岩かげ露ふみて夕日の湖に出でにけるかな
 秋山のもみつ木の葉の色はあれどちにし（朝日短歌二）のちの空のあかるさ⑤
 秋山の青き木の実を食ふらしき鳥の糞が岩に乾けり（朝日短歌二）
 秋山や木の実さはに実れどもまうら寂ししもみづる葉の色①
 秋山に童子うちむれ笑ひつつなんとうまさうに食み居り木の実①（新萬葉集九）

秋山の黒き木の実は極まりてここに來れる我は居ねむる（白き山）
 明らかに見むと木下に寄りゆけば桐の紫空にまぎれけり⑭
 秋を強く匂はするかな木屑の金の小花は咲きこぼれつつ①
 あくまでも伸びし梢にひかり落ち芽吹く櫓うしの木立はつづく②
 あけがたのはげしき風に吹き散りし木の葉に匂ふ庭におり立つ
 晩あけくれ闇を耳そばだてて聞きてをりいづこよりいづこへ馳する木響きこや（養神）
 朱の花の垂り咲く晩夏の木立幽し「持続」と云ふ言葉我も書止む②
 あけ放つ表障子にしきられて庭の木立の枝組ぞよき（幸木）
 通草あけびの木花をつけたる草原に霧淡く這ふ沢かあるらし②
 あけびの木花を待ちたりほのぼのと山沢水は霧立てながら（新萬葉集六）
 あけぼのの木かげしみに鳴くせみはいかにすすしき羽をきるらむ（きこさき）
 あけぼのの木蔭になける蟬の羽のすがしき夏の朝にもあるかな①（きこさき）

與謝野 晶子 松本 千代二 初井 しづ枝 清水 信 富岡 冬野 白水 吉次郎 宮 柊二 岡野 直七郎 依田 秋圃 吉井 勇 若林 牧春 近藤 元 竹尾 忠吉 若山 牧水 豊島 逸水 川田 順 土岐 善麿 日高 為也 花田 比露思 米田 雄郎 斎藤 茂吉 窪田 空穂 米倉 久子 山崎 一郎 薄井 磯子 朝吹 磯子 渡辺 信子 半田 良平 中西 悟堂 中西 悟堂 和田 山蘭 和田 山蘭 和田 山蘭

吾子と来れば久能の山の石段に落つる木の実の音も親しき
 朝あけて木かげに見ゆる空蒼し蚊帳の中より電灯を消す
 朝あけの時雨にぬれし木の梢のさやぎは寒しまだ曇る空に
 朝あけて松の木より上るものあり雲にもかもあらむ⑤
 朝々のかぜの冷たさ木の梢に鵲の鋭声もきくべくなりぬ
 あさあさの木葉さわたり山の峽を温泉の香かぎよる山彦男
 朝々を庭の木叢の間に透くひかりすみつつ秋は来むかふ②
 朝あらし音さわがしく聞ゆるは太木の木葉散るにぞありける①
 朝の緑に木洩れ日ゆらぐ影踏みつころよき間に手紙一つ書かむ
 朝光ははやもけふれり霜風に木立の枯葉なほとどまらむ
 朝かげを賞でつつをれば木ぐれ山雨落ちて来つ卯つ木の花に
 朝影は古い木立の間にありぬ小鳥のこゑの清くひびきて⑥
 朝光の中に木屑を飛ばしつ句ふ新木を今し挽き断る③
 朝光を賞でつつをれば木ぐれ山雨落ちて来つ卯の木の花に
 朝光ははやもけふれり霜風に木立の枯葉なほとどまらむ①
 朝かげの松の木群に鳴くこゑの沁みてしづけき今年の郭公⑥
 朝風のざわとし吹けばはらはらと梢はなれし桐の木の花
 朝風に桂はなちるしきりなり木かげに語る家のをとめと⑤
 朝風のざわとし吹けばはらはらと梢はなれし桐の木の花②
 朝風に峯の木の葉のちるを見れば一葉一葉に悟りなりけり
 浅き夜の月影清み森をなす杉の木末の高き低き見ゆ①
 朝霧の未だ霽れざる杉木立間遠く聞ゆ郭公の声
 朝きよめするかたよきて木がくれに庭めぐりするうぐひすの声
 朝ざらふ庭の木の間ゆ灯影洩りほのかに窓のあかき家見ゆ①
 朝霧の未だ霽れざる杉木立間遠く聞ゆ郭公の声
 朝霧のなごりたもてる杉木立間遠く聞ゆ郭公の聲
 朝霧の晴るる即ち目の上に群り茂り大杉木立
 朝霧に木肌濡れ立つ大杉の太き張り根を踏みて息づく③
 朝霧の晴るる即ち目の上に群り茂る大杉木立
 朝雲の晴るる日ざしに蒸されつ木葉の青くさきかも①
 朝くらき林を行きて聞きにけり繁く木づたふ霧の雪を②
 朝曇りに起くれば屋根々々の白霜が木枯の為に飛び散りて居る空
 朝けより木がらしすさぶ冬の空きびしく青く晴れとほりたる①
 朝けより冴えかへりつつ木原には雪は平に消残りにけり①
 朝咲きて夕にはちる沙羅の木の花の木かげの山鳥の糞

吉井 勇 長谷川 銀作 森 三樹雄 島 木 赤彦 富山 太刀夫 太田 水穂 臼井 大翼 明治 天皇 金田 千鶴 初井 千枝 依田 秋園 高田 浪吉 玉城 徹 依田 秋園 初井 千枝 宮 柊二 菊池 知勇 佐佐木 信綱 菊池 知勇 福田 行誠 正岡 子規 村松 芳郎 小出 繁 平福 百穂 松村 芳郎 松田 常憲 真田 杜平 前川 佐美雄 若林 牧春 真田 杜平 山下 秀之助 中村 憲吉 鈴木 金二 清水 乙女 斎藤 茂吉 北原 白秋

朝さむく雨降りしきり紅葉せし木立のなかを鴉啼きすぐ
 朝さむみ桑の木葉に霜ふりて母にちかく汽車走るなり
 朝しぐれ塔の庇のあをを木立はづれに見えて寒けき
 朝時雨止みて冷え冷え殿山の松の木肌を霧巻上る
 朝しぐれ塔の庇のあをを木立はづれに見えて寒けき
 朝時雨松の木葉にふるからに松の木葉のこぼるらしも①
 朝しぐれはれて日の射す木置場の古材木より霧立ちのぼる①
 朝湿る松の木肌の春を言ふ創の癒えゆく君がしづけし①
 朝霜に風も動かねば日は出づれ林の木霊未だしづけし
 朝霜の庭は掃かねば樸葉の木下に落ちし黒き実の玉①
 朝空のほがらほがらにうちさやぐ木の葉の梢はすがやけきかも⑦
 短歌大系
 朝空の曇りうすらぐ日の在り処霧しづくする木の間より見ゆ
 朝空のきびしい光だ、木立のてっぺんにある偵察兵の気持を考へる⑨
 朝たけし庭の木群にほととぎす来鳴きとよもす山の温泉は
 朝月の光悲しみ初秋の木の下の露にみれて行くかも
 朝つゆの木かげのみゆや山深き暁の光を揺れて湛へり①
 朝づく日いまだささなく河の冷え木の間とほして障子にせまる
 朝づく日うるほ照れる木がくれに水漬けるごとき山ざくら花
 朝戸出にみればそのふの芝のうへに木葉こぼれて霜ぞきらめく
 朝戸出に杉を木高み飛びたるは声に鳴かねどほととぎすかも①
 朝鳥は啼きつつ寄り来家裏の日ざしおくれとどく木群に④
 朝どりのいまおとしたる木の葉のみさやかに見ゆる庭のしもかな
 朝鳥のななめに落つるかげ寒し坂吹きこゆる木がらしの風
 朝鳥のわたりの鳥の飛び越ゆる富士の真木原夏かたまけぬ
 朝鳥は木ぬれ渡りて囀りぬ御殿仰ぎ立ち居り我は①
 朝な朝なおなじ木の葉にとまり申しかまきりは今朝の霜に死にたり
 あさなあさなしぐれの染むるもみぢ葉に松の木の間もさやけかりけり
 ①
 朝なきて浪音たたす松蟬は磯木の梢にはや鳴けるかも
 朝な夕なおもはざりしに冬に入る山の木葉はさびしかりけり①
 朝にけに時雨なづさふ雑木立ここの山も染みて来にける
 朝庭の梨の木かげに牛つなぎ父は立たせり牛をながめて
 朝庭は吹き荒れてありはるかなる山の木の葉の散りまじりたる③
 朝の霧晴れなむとして展けたる木群は比叡の尾根につづけり①
 朝の霜いまだくづれぬ木がくりの細みちにきて相因りにけり①

山口 茂吉 斎藤 茂吉 北原 白秋 酒井 重子 北原 白秋 吉植 庄亮 関 得一郎 金子 信三郎 伊藤 左千夫 岡 麓 尾山 篤二郎 竹内 銈三 前田 夕暮 吉植 庄亮 熊谷 武雄 島 木 赤彦 上田 英夫 若山 牧水 東伏見宮妃周子 花田 比露思 竹尾 忠吉 小出 繁 本居 豊頼 北原 白秋 森山 汀川 和佐田 航一 明治 天皇 宮沢 鉄之助 斎藤 茂吉 北原 白秋 古泉 千樫 中村 憲吉 林 光雄 寺門 一郎

朝の戸をあけつつ見ればあはれあわ雪、たわたわに春の木立を埋むるあわ雪⑤

朝の戸を開くるすなはち眼のうへより雨霧を吹く大杉木立③

朝の庭柿の梢葉の照りまぶし木の間に透きて燿よふ蒼空（多磨）

朝の日の木の間ゆめらぐ明るさに母の御骨はあげ参らする

朝の日に木肌白くも見えすけば山の寒しと鳴くみそさざい

朝の日の木の間ゆめらぐ明るさに母の御骨はあげ参らする

朝の日の照り忽ち消えて庭の面に木立の蔭がしめりたるまま

朝の日は松の木梢にしみら映え秋ふかき海のしほさみを聞く

朝のひかり泰山木の葉にありて湧きあがるごとくに機音きこゆ

朝の窓木の葉の型に凍りつつ植物原初の態も見るべく⑤

朝の涼かしこにあらむ白鳥は二つ相寄る木暗の水に②

朝早み遠く来にけりたなそこ赤き木の実を一つ持ちある

朝はやき霧の籬をとほすもの木の葉散るなり日のさして来も（小遠）

朝はやき楡の木かげに金髪露西亜少女ばかりが居りてたのしげ④

朝日かげ澄みてかがやく椎の木梢のしげり細くなりぬ①

朝日かげにほひそめたりよをまもる神のみその松の木ずる

朝日影かげほのかにもれて滝つぼに地下き木の葉につらは光る

朝ひかりうごく木原に 我れを伴ふ くにとのおもて潤ひをみる

朝日かげ木の間ゆきせば霧晴れて石走る滝のさやかに聞ゆ①

朝ひかげにほひそめたりよをまもる神のみその松の木ずる（新年御歌）

朝日かげ山の木の間をくぐりつつ谷へまばらにとんぼ飛び交ふ①

朝日さす柿の木立の赤ければ淡々しとほき多良のやまなみ

朝日さす杉の木立に松蟬の鳴きしるきけは今日も暑からむ②

朝日さへあふぐかしこさ神路山雪ましろなる杉の木の上に

朝日さす杉の木梢に鳥飛び蜻蛉のともむらがりて立つ⑨

朝日山木立しげりて宇治川の河上くらし夏の夜の月①

麻生あり煙草畑あり藪木むら栗田もつきて那須野は尽きず

朝まだき園の木立にさへづれる小鳥はなべてたのしかるらし

朝まだき霜ふみて参詣るみやしろの杉の木立に鳴く鳥のあり③

あさまだきふく風さえてわたどのの板間も見えずちる木の葉かな①

朝まだき障子あくれればひやびやし畳の上に木影ゆりつつ①

朝間にて郭公鳥の声多したかやまはらの梅の木群に⑧

浅間嶺をあふぎ親しむ道ながし榎木原に雲かがやきて

窪田 空穂

中村 憲吉

佐久間 脩

小枝 功

白仁 秋津

小枝 功

鹿枝 壽藏

高田 浪吉

土屋 文明

高安 国世

田谷 鋭

古泉 千樞

斎藤 茂吉

岡 麓

吉植 庄亮

竹尾 忠吉

湯浅 倉平

川端 千枝

石原 純

花田 比露思

湯浅 倉平

清水 比庵

中島 哀浪

菊池 知勇

香川 景敏

吉植 庄亮

明治 天皇

金子 元臣

岡野 直七郎

久保田 不二子

昭憲 皇太后

中井 コツフ

川田 順

松本 常太郎

浅間山けぶり伏しなびく木枯に小諸の町は早く戸ざすも⑦

浅水の澄みて湛ふる林泉の池岩間の木賊梢枯れそめぬ③

浅みどり匂ひたつばかりのゆりの木の高き梢に風も鳴らうよ②

あさみどり若葉を隙きて木洩れ陽のたぎる瀬々にひかり射すかな②

あさみどり楓の木をば来てゆする夜明の風にまじれり胡蝶（夏より秋）

朝目覚め木の葉そよげり尾長鳥翼空いろに声さけびつつ

浅山の木叢さわだてて今日風つよし息きらしめる夕日の中に③

浅宵を月の出しほの風ならむ庭木の梢ぼの揺れ居り（新万葉集三）

朝よりの木枯いつかをさまりて巷は霧の夕べとなりぬ②

朝より撮影所の音楽きこえて来て寒き木の間をたのしくするも（多磨・新萬葉集）

朝より吹きすさびたる木枯の間どほくなりつ暮れ入りにけり

麻布台とほき木立のあたりにはつばさ光りて鳶の翹れる

あざやかに木の葉のかげのちらばれる月明の夜は友のおもはる①

足音のひそかなれば我がゆけど喋囀り止めぬ木がくれの鳥④

足音を待ちしかの夜も柑橘の花は匂ひき木下の闇に②

愛鷹のいただき疎き落葉木に木がくり見えて富士は輝く

あしたには石にのぼりて老の手に素振りの木太刀振りてありしか②

あしたより曇かさなりて暗くなる冬田の面に音する木枯④

朝より吹きすさびたる木枯の間どほくなりつ暮れ入りにけり

脚とめて聴くや木ぬれの鳥の声ささく節の人のしほしむ①

足延べて草履つくれる童女あり松の木陰に簑を敷きて

芦の湯もぬるくなりけむはこね山みねの木枯ふきまさるなり①

あしひきの山こえくれば木がぐれに青海原のなみぞみえける②

足引の大森山の木がぐりに葬火あかくさ夜ふけにけり

あしひきの山上の山の木下路うちもだしつつのぼるわれらぞ③

足曳の山下かげ路淋しに松の木がぐり桜花さく①

あしひきの山に音たつる木枯の庭松にくる夜々をせつなし

あし引の山にこたふる山彦のをたけびのこゑに木々の葉さやく①

足曳の山の木の間を飛びくぐり枝移りするうぐすを見き④

あしひきの山の常磐木立ち暗き空海の墓所を眼には視むとす⑥

足曳の山ほととぎすいつしかも木葉荳る吾に隣りてを鳴く④

あし引の山間の谷に雨なごみ河原木がぐりき霧みだるる

あしひきの口上の山の木下路うちもだしつつのぼるわれらぞ③

足曳の大森山の木がぐりに葬火あかくさ夜ふけにけり

足びきの山の木原に夕づく日光となて散る木の葉あり②

島木 赤彦

広野 三郎

川上 小夜子

立岩 茂

與謝野 晶子

北原 白秋

鐸塚 静枝

肥塚 完二

塚田 菁紀

宮 柊二

杉田 嘉次

古泉 千樞

森園 天涙

若山 喜志子

久保井 信夫

若山 牧水

立岩 茂

島木 赤彦

杉田 嘉次

窪田 空穂

山口 恵意路

明治 天皇

結城 哀草果

相馬 御風

安江 不空

水口 俊平

太田 水穂

矢沢 孝子

川田 順

篠原 志都児

堀内 卓

相馬 御風

結城 哀草果

吉植 庄亮

あしびきの山の常磐木立ち暗き空海の墓所を眼には視むとす⑥
足を早め常盤木立くぐり出てふり仰ぐてつべんなほふる鴉①
味知らぬ珍の木の実とわが惜しみ日毎眺めて熟れそめにけり①
汗あえて撓ゆるたむけの草むらに草蟬鳴きて涼し木蔭は①
汗あえてぬれたる飢の肌の照りこの木の花のうつりよろしき
汗あえて越ゆるたむけの草村に草蟬鳴きて涼し木蔭は①
汗垂りて中央墓地に來りけり墓地の木下にしばし眠らな④
校倉の旧し木肌の手ざりはりをなつかしみつつ南倉に入る②
佃安く葉もらひて外に出たり裸にならぶ街の木立は③
愛宕嶺を木の葉染むれば刈りいそぎ麓の田居に麦蒔きはじむ③
あたご山峯の木枯し早けれどゆきけの雲は動かざりけり
暖き夜やと歩めば路の上にうつる木影のおぼろめきたる
あたたかく冬の雨ふり霧中にけふる木立のしづけくもあるか①
あたたかい日が照つてに色あせた冬の木立はだまりこくつて④
暖き夜やと歩めば路の上にうつる木影のおぼろめきたる②
佃安く葉もらひて外に出たり裸にならぶ街の木立は①
新しく木の葉色づく山に入り昔の秋は思はずもがな②
新しく木原をひらき住みつかむバラック見え床に子が這ふ
あたりみな光りひそまる冬山の落葉木がくれこの小鳥啼く
あぢきなし老のたたむきたわいなく素振りの木太刀持ちおもしろする③
あぢきなき背中合せの木の葉かなわれはわれぞといふかたちして②
たちのうた

川田順	角鷗東	植松樹	長塚節	前田夕暮	長塚節	斎藤茂吉	西郷春子	松倉米吉	中沢庭柯	間島冬道	窪田空穂	関得一郎	西村陽吉	窪田空穂	松倉米吉	與謝野晶子	中山周三	若山牧水	小杉放庵	中原綾子	松井如流	松村英一	野村清	竹尾忠吉	松村英一	尾山篤二郎	與謝野晶子	岡本かの子	斎藤茂吉	香川進	米田雄郎	松田常憲	佐佐木信綱	宮柊二
-----	-----	-----	-----	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	-----	------	------	-------	-------	-------	------	-----	------	------	-------	-----

あなやには松の木の間へ仰ぎたる青き薨はあとかたもなき⑤
あはれにも瘦せし木の葉のかたはらへ濡れて桜の葉のうちにけり①
あひともに疑ひながら聴く鳥のするどきこゑは木の間に近し⑥
あひむかふ崖の家居の板戸にはうつる木の影濃くなりけり⑦
あふぎみる木の間へ秋の空晴れて静けき山にふたり入り来つ①
逢坂の雑木黄葉の梢を這ふげぶりを母と思ふべきものか③
逢坂山越えにけらしも吹きあげて木群さわぐは冬湖の風①
逢坂山電車窓にすれすれにこぼれむとする黄いろき木の葉
あふぎみる山の木の葉のさゆらぎようへは蒼くすみきりし空②
あふれ温泉は青滑苔をながれつつ木蔭に入りて光を返す③
あぶら蟬杉の木膚をいだくときそのたまゆらを目守らむとする④
あぶら筒あるは木の実をいさるよし宗鑑居士のきりし竹はや⑤
楓の木の池に飼はれる黒き静けき一群の鯉⑥
雨蛙庭の木立に鳴きいでて日食の時刻は来向へるらし⑤
天くだす五月雨はれて矛杉の木ぬれが上に虹かかる見ゆ①
雨雲のしたにそよぎてをりしかば目に沁むいろを木の葉はもてり④
雨ぐもりつづける空の小暗きに黒み繁れる桐木立かも⑥
雨けづくうつ木の花に昼たけてくもる遠野の飛行機のおと①
天さかる山の岩門を鳥じもの木末をよぎて秋空に立つ①
雨そそぐらき木立の垂枝のゆれてはこぼす雨の雫を④
天津庭の松の木かげに思ひなき人の子二人水に遊べり⑥
天てらす神の御馬のいななける清き夜明の杉木立かな②
天てるや日のほがらかにうち渡す岡の木原は木の芽青めり
天の下の人を木蔭にあそばせてただぼくほとほゑむ桜①
雨水がはげしくながれ込むゆゑに下水口に木の葉のとどままることな
し①
アムゼルが椈の木立に來て啼く冬のあひだは啼かぬこの鳥④
雨あがりなれども池の水澄みて木むらをもる日はとき来ず③
雨あとの雫こぼるる山松の木末がうへや澄める青空
雨あとの夕映のいろしづかにも木の間に照りてありけるかも②
雨あとの力ある水くだるらしふかき木の間に谷音ひびく⑦
雨がふる朝木立より鳴くこゑ疾風はいまだ来むといはぬ⑤
雨來たる秋の磐城の山麓の木原のしろき立枯の上⑤
雨くらき杉の木かげの苔におちて馬酔木の露と花とみだるる⑬

四賀光子	與謝野晶子	斎藤茂吉	尾山篤二郎	奥貫信盈	吉野秀雄	鈴木幸太郎	岡本喜作	湯本喜作	木下立安	斎藤茂吉	安江不空	宮柊二	半田良平	横田專一	窪田空穂	芥川徳郎	蕨真	松岡貞	島木赤彦	與謝野晶子	伊藤左千夫	石村千亦	野村清	斎藤茂吉	岡本吉	藤沢古実	神原克重	宮柊二	斎藤茂吉	熊谷正雄	尾上柴舟
------	-------	------	-------	------	------	-------	------	------	------	------	------	-----	------	------	------	------	----	-----	------	-------	-------	------	-----	------	-----	------	------	-----	------	------	------

雨くらし向ひの繁山高処にて木ぬれに白きは朴の花かも②
 雨さと過ぎとみに照る日の光あをし椋が木群は雫しやまず⑪・山と水と
 雨霽木づたふ道をのぼり来てひとところ明かるき躑躅の群落③
 雨しぶく木の間にける男児は長靴を穿き合羽をかむる⑦
 雨白く木の間にける高原を走れる汽車の窓によりそふ
 雨過ぎし暗き谷間に木の葉みな明るく光りしばし雫す
 雨つゆの降りかかる木の間ぐり来て君が家の庭に栗鼠のはしる見た
 り
 雨ながら焚火の煙ひろがりて木立のおくに入るがしづけし⑤
 雨に飽く日々の夕べに青葉樹の木の間にくだる茜色はも①
 雨にか雪にかならむ曇り空に梢をゆする何の太木ぞ③
 雨のうちに伸びし若木のこずゑ若葉一刻の照に萎えゆくを見つ①
 雨の如木原はけむる窓の明りさめて少女の死をば守りき④・角川文庫
 雨の中を来しくもしく春日野の木立のなかの小男鹿のこゑ①
 雨の日の桜見に来て園の島啼くを聞きをり雨の木の間に⑧
 雨の晝公園口の木の下に炎立ちをり芥を焼く火⑦
 天の門ゆ落ち来るみづに七山の木の葉みながらいろのさやけさ⑨・新萬葉集
 雨はれし杉の木立をこの朝け小雀のむれは鳴きつつわたる⑭
 雨霽れて木の葉の雫はたたとひと時あつき西窓の照り⑤
 雨ひえて香りをさめし木屑は花こぼしをり苔しるきまでに⑨
 雨ふりて木立濡れをり、湯の宿に、湯をあびて来てしづかに居るも①
 雨ふりて暗き木立のなかにある温泉に下りて幾たびも浴む①
 雨ふれば泊れる船にあるごとく木陰に濡れて白し我窓⑭
 雨ふれば松の木かげにあつまりて池にはうかぶ鴨ぞすくなき①
 雨もよふ夕べの曇りあたたかく青桐のあをき木肌光れる
 雨もよひきさせる林泉の木立には蟬の鋭声のつ透れり⑭
 雨もよひくもりながらにける夜の朝さむけき木枯の風①
 あめりかの子ども泣きやめ居たりけり木の葉明るき下谷の小屋⑦
 雨を吹く風は麦田にはやくして雷山の木の間芽ぶかず⑨・新萬葉集
 あやしくも一山の鳥鳴きたてり夕日はまる木梢木ぬれに⑤
 あやめ咲く松の木下の庭土に斑に白く薫吹きにけり①
 歩み入る多岐山木立冬ふけてひかりは澄めり落葉のうへに①
 あゆみつづける目にいつまでも山の上の杉の木ずるが一行にある④
 荒磯のあら松原木がくれに啼きしいそよ汀べに飛ぶ①
 あら金のま日てり暑き山の上に木葉苅り居れば鳴くほととぎす

木下利玄
 佐佐木信綱
 長谷川銀作
 宮柊二
 若山牧水
 対馬完治
 片山広子
 中村憲吉
 初井しづ枝
 小宮良太郎
 金子信三郎
 近藤芳美
 生咲義郎
 宮柊二
 宮柊二
 矢沢孝子
 斎藤茂吉
 太田水穂
 中村憲吉
 石原純
 山口茂吉
 與謝野寛
 昭憲皇太后
 南出吉春
 山田弘通
 昭憲皇太后
 相沢貫一
 吉野秀雄
 山口不二花
 金子信三郎
 横田専一
 隅田葉吉
 篠原志都児

あらかぜ木むらのしげみ吹きみだし椿の花が目にあたて揺れる
 あらき風ふかぬみそのの木立には蜘蛛のすがらぬ日ぞなかりける①
 暴風が木の葉吹き裂き投ぐる夜を工場にこもりひとを偲べる①
 嵐去つて木蔭の岩かげのイハタバコ一枚の葉のみにけり⑤
 嵐どと夜の木立に鳴りつつも過ぎて行ければ虫鳴く声す⑤
 あらしに揉まれ峡間の空をまひおつる青き木の葉をさびしみにけり⑧
 あらしのあと木の葉の青の揉まれたるにほひかなしも空は晴れつつ①
 あらしの後窓に貼りつきあし木の葉萌えしばかりのいろをばもちて④
 荒潮の八百会さみの牡鹿岬木の葉のごとし我が一つ船②
 嵐山、さくら木立の真裸に寒き光に透きたるを見る④
 あらしやまみねのあらしに雲はれて松の木の中にみゆる月かげ③
 嵐山花の木かげも暮れそめてふもとの寺の鐘ぞきこゆる①
 あらしやまみねのあらしに雲はれて松の木の中にみゆる月かげ③
 荒妙の藁屋の背戸の井戸ばたに生ふたづの木花さやに咲く
 改まる比叡へ登る舗装路は木深き谷をしりぞけつづく⑧
 荒野へのくぬぎの木梢風を強み諸葉ゆれ動く空にむかひて①
 曠野らの木立さながら焼き退けて新墾畑人はひらけり①
 洗はれた気持すがすがしく、木の葉木の葉の霜花をみた⑪
 あらはれて領巾振りつらむ今よりも繁みさびにけむ山の木の間に⑫
 洗はれた気持すがすがしく、木の葉木の葉の霜花をみた⑪
 荒降り雨に摧けてぞ鳳凰木の花も苔も軟ら葉も散る①
 あららぎの赤き木の実も食ひにけり八月七日高野の山に①
 あららぎの朱実こぼるる奥津城の木群を透きて深く澄む空②
 あららけく落つる木の葉の音ぞする簷端に栗の木もありぬべし⑧
 有明の大きな月影未だ褪せず冬枯の木立に照り渡る見たり⑫
 ありありと思ふ三十五年前木の問めぐる道かはることなし④
 ありし日に父があつめし黄楊の木の葉むらみな繁し秋の光射し②
 ありし夜に妻とあるきて二日月を木の間にけりしぎんぎのやなぎ①
 ありとある五月の花をたてまつる木末の藤も谷のつつじも③
 ありのまま甘き果実の成る木立みな安らかに培はれたり⑥
 歩き疲れてねむの木陰に憩ふ間もいらだたし砲声とどろき止まず
 ⑤
 アルプスの木群が中の赤松のまして親しも一本ある松②
 あれあとの庭を見まわるあからさまに倒れし杉の木の下をくぐる③
 生れいでし直後の声かひぐらしの木のくれの声したたるごとく④

片山広子
 昭憲皇太后
 森園天涙
 小宮良太郎
 窪田空穂
 水町京子
 古泉千樫
 横田専一
 熊谷武雄
 窪田空穂
 樋口一葉
 明治天皇
 樋口一葉
 伊藤左千夫
 高田浪吉
 原真弓
 神原克重
 前田夕暮
 尾上柴舟
 前田夕暮
 加納小郭家
 菊山当年男
 久保田不二子
 太田水穂
 松崎悦次
 小暮政次
 鹿兒島壽藏
 橋田東声
 河杉初子
 高田浪吉
 渡辺順三
 朝吹磯子
 島木赤彦
 窪田章一郎

荒沢に枯れ立つ冬もの木末^{コヌレ}にはま青き寄生植物つけり①
 荒畑とく咲く梅の木かげまで行きて戻りし靴の痕見ゆ③
 あれ見給へ落葉木立の日あたりにすまひよげなる小さき借家④
 あわただしき幾日過ぎけむ目につきて木の間の秋は星明りせり
 淡雪より成る木立なるかも狭雪なる椎の高木と椿の高木②④
 あわれまた木の葉散りて来るなりとわれやいくたびおどろくならむ②
 青嵐山王深き木間に来て青蟲のごと横たはるかな①
 青嵐ふかき木の間の下草にねて養へるころの太さ①（現代短歌大系）
 青あらし吹き落ち来る谷川の椎の木かげをゆき行きて釣る①④
 あをあをと高き木立にかこまれて薨古りたる浅草の寺
 青々と梢しげりて庭の木のあるき中に蜂のうなれる⑤
 青々と木の間のブルー水張りて風去りしのちしづけく湛ふ⑥
 あをあをと高き木立にかこまれて薨古りたる浅草の寺①
 青々と楊が影を落す所木下闇をなして恋ほしも②（角川文庫）
 青き風そこより吹きぬ七月の木立の中の大理石の館④
 青き木の木蔭に憩ひ飯たぶる幾年ぶりのこのためしきぞ⑤
 青木の実赤くくろずむ夕日ごしそれしばかりの庭の木むらに④
 梧桐の暗き木群の打続き星揺らめけりきらきらしくも
 青桐の木ずる木ずるに人形の笠かも置ける赤き若葉よ③
 青桐の木立が作るひろき陰岩多き土のつめたくも白き②
 青桐の木立のしたの湿地にあさひとどかず雀きてある（きさくき）
 青桐の木立めぐりて舞ひ狂ひ真白き蝶の離れむとせぬ③
 あをぎりの木のまをもりてわか竹の露にやどれる月のすずしさ
 青桐の木肌木肌に蟬すがり夜気冷ゆる庭の月としなりぬ②
 青桐の木肌にすがる空蟬に夕日沁みあて瑤瑤のごとし⑤
 梧桐の瑞の木膚にさす影は梅の垂枝か果が円し一つ①
 青草の野路はながしまむかひの杜の木の間に筑波山見ゆ（朝雲）
 青胡桃落ちてころがる木下蔭冷たくふかく梅雨湿りたり③
 青黒き木の葉を眺めわたるに涙す今日の事はてにけり④
 青苔に染みうつくしき斑照りこの木洩れ日の幾時あらむ
 青苔の色美しと木下かげきみ立ちどまる秋まひるなり④
 青苔のいろは冷たしこの森の木下にとほる朝日の光④
 青苔のふかき木の間の間をゆくなべに光るものなく湿とりくる身は
 蒼鷺の巣どりの騒ぎひそまりて入谷の木群月ふけにけり①
 吾を如何に思せか父は雪の日も木これ芋ほれ風呂たけと告る
 青芝の遠きつらなり傾きて杉の木立の暗きにかくる①⑥

窪田 空穂 野沢 柿寛 高田 浪吉 島田 赤彦 安田 章生 北原 白秋 金子 薫園 塚田 青紀 岡田 麗 穂積 忠 吉野 秀雄 川島 園子 須川 信行 窪田 空穂 和田 山蘭 川島 園子 窪田 空穂 林圭子 谷 鼎 岡野 直七郎 堀口 大学 宮 柊二 岡野 直七郎 宮 柊二 金子 薫園 岡野 直七郎 若山 牧水 加藤 東籬 和田 山蘭 菊池 知勇 窪田 空穂 橋田 東声 若山 牧水 尾上 柴舟 田中 四郎

青島の木立を見ればかなしかる雨のしげりおもほゆ③
 あをじ啼く野の木がくれを歩みけり冷たく光る青ぞらのいろ⑥
 青白く月はいできぬ木枯の山際明りまだあせなく⑥
 青杉の木立のなかをくだりゆく流れけ遠くこもらふがきこゆ（新万葉集）
 蒼杉のしげる木立のをちこちに桜ほのぼのと明るく咲けり①
 青空にそそれる杉の木末べの白雪凝りて成りし草かも①
 青空に尋むるものなき今日の日の木枯のはての西のくれなゐ①①
 青空の奥へつづける杉林木ぬれかすかにけぶり澱める
 青空をわづかに見せて杉木立ほきき高く雲にとどけり⑥
 青ちくの梅の苔のふふみてあり木かげにのぞむ大木曾の河原（椎の木）
 青葉木の木群ねり来る絹の傘幾つあはれと見れば消えつつ
 青葉ちらすあふちの木下あかるみて俄に射しぬけふの入つ日④
 青葉張るむくろじゆの木の下の闇に瀕の鳴る音す角倉旧跡⑧
 青葉山かく明るくて君逝きしか仰ぐ木ぬれの藤波の花①
 青光る翅かはし蝶のとぶはやし木立の中にまぎれ入りつつ②
 あをふちのうづまく水にただよひてうかぶ木の葉は疾くもながれず①
 蒼松のしげる木立のをちこちに桜ほのぼのと明るく咲けり
 暗渠きはまる木立の家からカキケコといふ子供の声がきこえる⑫
 暗路は水奔りつつ岩の面に一木が敷ける落葉寂けき③
 杏の実うすく赤める木の下に砂を流せるあけがたの雨⑩（青海波）
 案内者に連れられて一群の人のきぬ蟬は木肌にあたりて飛びぬ⑤
 イイギリの木末虐ぐる春風吹かれつつ飛ぶ河原鶏あり②
 飯田町信濃に向ふ汽車ありて虚空に鳴れり木がらしの音⑪
 家ありと見ざりし山裾に夜となりて二つの灯木群より洩る②
 家々の軒に庇にむらさきの木の実の房はおもげなるかも⑩
 家々の水涸れて久し高槻のほふ木かげに竝びつつ汲む④
 家うらの檜の木むらの雨零落つる音さへ春蘭けにけり①
 家裏の枳殻垣の花見えて滴るばかり木叢の影しむ（多磨四）
 家越すと庭より庭へ時季なしに移し植うる木枯れずもあれな②
 家近く木葉のさわぐ曉の庭のおもてを起きては見入る
 家にあらば妹が干すらむ洗ひ衣わが手と干すか森の木のまに①
 家のかげ木の蔭の道ひややかに身にしてみて秋のふけ渡るかも
 家へだつ遠の木末に咲く花をい吹きまどはし我庭に散る
 家も木立も街の家並も何もかも新しく明るくいまの僕の眼に
 庵のうちをぐらくなりて木の間より向ひの山の青きひと時④
 いかならむ運命が待つ街路樹の暗き木蔭に佇つ占ひ師④

斎藤 茂吉 前田 夕暮 太田 水穂 多河 外喜治 中村 憲吉 蕨 村 憲 吉 吉植 庄亮 古泉 千樫 柳原 白蓮 佐佐木 信綱 釈 迢空 松村 英一 宮 柊二 鈴江 幸太郎 栗原 潔子 昭憲 皇太后 中村 憲吉 前田 夕暮 佐野 四郎 與謝野 晶子 松田 常憲 佐伯 敏子 與謝野 晶子 鈴木 光子 尾山 篤二郎 小暮 政次 竹尾 忠吉 重松 奈美恵 浅野 豊子 高田 浪吉 長塚 節 今井 邦子 正岡 子規 渡辺 順三 與謝野 寛 安田 章生

いかなる名の木にやあるらむ冬枯れの梢くろぐる芽吹かずあるに
いかにかく みみづの死ぬる日なりけん 木かげに栗の花しづ降るを

①

いかに悲しく秋の木の葉の散ることぞ髪さへ痛めいのち守らむ⑤

いかにかはならむは知らず裏山の木むらあふぎて新しき年⑧

いかにしてゆふべは越えむ昼もなほ木の下くらきうつ山道①

如何にも木の間の声の鳥沼にわれはおもひを寄せしなるらむ②

いかめしき松の木の中に黄なる蝶ひとつ舞へるもあはれなるかな③

衣笠の山は木高き赤松の幹すくすくと夕晴に見ゆ

生島の木蔭に泊てし苦舟のいよりかたまり安らげく見ゆ (新万葉集六)

息つぎつ砂山越えぬ見さくれば木原がくりやに青海展く①

息づきてひらく福寿草木の下の黄のかたまりに曇日のさす③

生きの齒を今日また二つ抜きにけり裾野木枯いたく身に沁む⑦

いくかへり旋回なして飛びゆけり小鴨の群はとき木原に①

いくさの火まぬがれたりし浅草の古き木群に秋蟬鳴くも④

幾霜にいく木枯に曝れにけむそげとして荒き骨立⑨

いく筋に光わかれて神森の杉の木の中にさす朝日光②

いくたびか時雨過ぎつつ空気沍ゆ木原は冬に入らんとすらし③ (角川文庫)

いくたりか疲れし旅の放浪者いこふ木影に我もいこへり①

意氣地なく風邪にこもれば硝子窓寒き木枯来てはゆすぶる③

いくつもの橋は木陰に見えけれど桑植えし対岸へはじめて渡る③

行くところみな熔炭の風化なり老木原くらく水ありて流る②

いくとせか岡の杉むらすぎぬらんだかき木陰のいとどすずしき (新萬葉集)

幾日か似りてあれば向つ家のざくろの木の実ほのに染りぬ

幾百の樵の立木に霧巻きて遠き木の間を明るくなせり⑤

幾まがり杉の木立はつづくなり雨したたる傘ふれてゆく

いくもとの木高き山楠老いし松影ふかくしてすがしも真砂地

幾世経し松の木下の群小松親と子と思へば落しげに見ゆ①

いくらかは芽ぶきの色のうかぶがにむかうの木立見つつ歩めり⑥ (冬空)

生垣に木がくりみゆる門さきの田植の人に雨のふるなり (山桜の歌)

生垣の小笠原松の木ぬれには秋まけてさがる糞虫おほし①

生垣は南の側の木の葉のみ萎れて黒く死滅を急ぐ⑦

池岸に会ひたる二人ああ若く木暗の道に接吻しをり⑧

池際の低き木叢の冬さびてかげろふ土になじむ親しき①

高田浪吉 宮沢賢治 若山牧水 高田浪吉 落合直文 小田観螢 中原綾子 土田耕平 中沢庭柯 坂井菊枝 千代国一 菊池知勇 岩上とわ子 吉野秀雄 太田水穂 久保田不二子 宮崎修二 萬造寺 村野次郎 植松寿樹 窪田空穂 岩倉具視 清水恒子 松岡貞総 清水恒子 宇都野恒子 築地藤子 岡地麗 若山牧水 加納小郭家 四賀光子 宮崎修二 鹿兒島壽藏 高橋希人

池の上の木の上にいてほのぼのとうねびごせは雲にうかべる⑩

池の上の丘の木立のしげり葉の中にほへりむらさきつつじ①

池の面に落ちし落葉は木枯にかたよりにつつ昨日も今日も (新萬葉集五)

池の面のたつ影くらき木むらには光をひきてかはせみ飛びぬ②

池の波静まりかねつ冬さりて木枯の風やむ日なければ①

池の西さやかに影す出島なる黒き木立と山の夕空⑭

池の端の楓木立に光る雨がありロビーに異国の茶をのみをれば①

池の辺に残れる雪のあかりつつ木立深き庭はすでに暮れたり②

池の辺の椎の木かげに来て休む山雀鳴けりその梢には④

池のみぎはのそこともわかぬ木群より碧き羽ひろげかはせみ来る④

池の面の白き氷は笹生ふる木の間に見えて溶けずか経なむ③

池深く沈む木立の影の上みぎはの葦は細くゆらげり④

池ふりて鶴の羽雪より白くこの庭の木立ものさびにたり⑫

池水にあかるく照れる冬の日の林泉の木立は清くおもほゆ

池水に沈むは木の葉子が玩具おもちやば吾子が投げこみしもの①

池水に松の木影の幽かにて春たちなづむうすぐもりかな

池水のおかるく照れる冬の日に林泉の木立は清くおもほゆ (うたへ)

生けるまま沈みて果てにし木の梢は白骨と化し水に手を挙ぐ⑨

池を蔽ふ木立があひに遠空の秋さるごとく清きひととき②

憩はなといえうなづく木蔭みち静かに生徒等の息づくらしき (秋風抄)

いさかへる二人のこゑの木魂して秋山のひよりしづかなるかも

いさかへる二人のこゑの木魂して秋山のひよりしづかなるかも

いさかへる二人のこゑの木魂して秋山のひよりしづかなるかも

いさかへる二人のこゑの木魂して秋山のひよりしづかなるかも

十六夜の月の明りは木の間よりかつが及ぶ草鞋穿く足に

石いくつ越え来る谷の水は澄む岸の木立の緑こき中①

石うちて木の葉は鳴りぬものかげは寂びぬわが山秋たけにけり①

石老の山をまもりて一千年頭鏡寺はふかき木立のなかに (新萬葉集四)

石段を埋めて散れる石楠花のはなびらは木洩日にすぎ透りたる④

石段を下らんとしたてかたへなる花梨の剥けし木肌にふれぬ④

石組に木叢に配す桔梗に咲かず一輪白またむらさき③

石ころの声なきこゑを聞くとせぬ人らの耳は木くらげか何③

石ころの流れゆく音木の梢にひびきて寒し雪解する日は②

安江不空 三井甲之 田沢孝次 松本幸太郎 花田比露思 與謝野寛 金子信三郎 高橋城司 安田章生 小宮良太郎 宮崎修二 山田百合子 金子薫園 佐藤佐太郎 塚田青紀 松木静泉 佐藤佐太郎 尾山篤二郎 村田利明 松田常憲 中村憲吉 高橋希人 鈴江幸太郎 三輪田美津生 松井如流 茅野蕭々 塩沢薫 山田百合子 高橋希人 岡本滋代 菊池知勇 若山牧水 高田浪吉 丘柴二 鈴江幸太郎

石塀のなかは木立の奥深き思はるるまでに雨降りしづく④
石道をきりきり行き居る足駄の音このちひさき湾に木霊を居らす

⑧

異人屋敷の籬におほきライラック木肌青きを今朝おどろきぬ①

伊豆の海島の木立はむらさきの岩を浪かむ上に茜す

伊豆守の墓域は木群に暗くして花かそかなりむらさきしきぶ（孤状列島）

いそぎゆく旅にはあれど桜ばなにほふ木陰はすぎうかりけり①

いそぎゆく雲のあゆみかな刈りこみし桧葉の木ぬれを流らふ見れば

いそのかみ古き思い出笑みかたり花の木下に更くらく惜しも④

磯山の木の暮れ来れば身なげびと多しとぞい磯前の見ゆ

磯山の上の木間の赤き屋根さくら飛ぶなり海に向ひて⑭

磯山の木の間にひびき鳴く蟬のひけつ二つのこゑはつづかず（新萬葉集九）

磯山の低き木の間にとべらの花白く咲きたり海曇る日を①

磯山の松の木の間に日のかげの流るるなして波こまかなる⑧

磯山の松の木の間の小さき家に語らふ君を親しとぞ見き⑥

板幽沢の落合の瀬を離れて木ぶかくなればやさし水音⑩

板縁にあぐらして見る庭の土低き木むらもなじみ顔せる②②

山頂は木立を低みあかつきの露ふふみ咲けり山百合の花

いただきは荒れたつ雲にかげりたり木むらここだく風たちて来ぬ

頂の木立も伐られあらはなる山原なして裾がくりたる⑧

頂の木の間の木の間ゆほの見ゆる瀬川の流れ野を貫ぬける③

頂きの木の間に動きぬし光星なりき今高くかかりぬ⑤

いただきの杉の木立に降る雨は立ちとどまりて見るべかりけり③

いただきの松に日はさし枯木立薄紫にけぶらへる山⑦

山頂は木立を低みあかつきの露ふふみ吹けり山百合の花①

頂より吹きおろす風に山腹の榛の木原はぞめきたちたり（山棲）

虎杖の茎立ち太き沢の辺の木立に雨のあがるを待てり①

いたましき心のひびに沁みてふく木枯の音の淋し師走は②

いたや楓の木蔭に坐せる大石「さくら」の歌を永遠にとどむる③

いたるところしげき木立のある国に子孫つぎつぎわれら生れぬ④（宿墨）

（詠草） いだき給へ秋は木の葉の落ちゆくも流れの白う冷えてゆくとも①

一群の木立に風のこもるとき空家の如き家構なりき⑦

一山の木立をつつむ鏡の音おほどかにしてこころしづまる

一山の太木にこもり鐘鳴れば寂まりまさる禪寺のうち（舊）

無花果の木下に濁る池の水落葉もろ共凍りつきたり⑧

長谷川 銀作

吉 植 庄 亮

君 島 夜 詩

與 謝 野 晶 子

林 不 沙 子

樋 口 一 葉

武 田 祐 吉

矢 沢 孝 子

窪 田 空 穂

與 謝 野 寛

小 田 切 浪 彦

寺 沢 亮

太 田 水 穂

岡 野 直 七 郎

松 村 英 一

窪 田 空 穂

小 泉 夢 三

清 水 三 郎

高 田 浪 吉

中 沢 庭 柯

高 安 国 世

菊 池 知 勇

尾 上 柴 舟

小 泉 夢 三

小 宮 良 太 郎

森 二 郎

今 井 邦 子

鈴 木 光 子

岡 麓

今 井 邦 子

松 田 常 憲

細 井 魚 袋

村 尾 圭 介

高 田 浪 吉

無花果の枯葉はたはたのこり葉の裏戸をうちぬ木枯のあと

無花果の木下に清める二度萌えの羊歯目守りのこし夏も過ぎなむ③

いちじくのとぼそを入れ茶の木原一すぢ小路画の室に出づ③

無花果の木の土下に埋めおきし葱とりに来つ宵の月赤し②

いちじくる朝空焼けて吾が来つる山の木原に風あれそめつ（新萬葉集四）

いちじくる朝の道に吹き散れる青き木の葉を踏みつつぞゆく④

いちじくる音をば立てて吹きとほる木枯のあり草を揺りつつ④

一谷はみなやけにける杉木立黒々として峯にいたるも②

一日一時間ほど日のあたる木陰の苔の秋づきて冴ゆ④

いちちはやく寒くなり来し木下蔭夜に入る暗き風が吹きたり④

いち早く朴のひろ葉の黄に散れる山の木の間の秋の水音⑭

市場へとその実は出だす柿の実がこのひと窪地異木立てる見ず②

市人の家いかばかりあつからむ庭の木立もみえずぞありける②

市人は桜の上にながむらん杉の木末の春の夜の月①

市人ら通りぬけ行く大寺の山内すずし夏木立して③

一枚の木の葉のやうに新しきさむしろにおくわが亡骸は⑭

一面の若葉の風の光り波桑の木原の朝日子の影

銀杏の芽ぶかぬ木肌あらはなるに切りこまれたるあと白くきはだつ③

一連の枯山水の石組の潭北軒北庭の木下闇（光風）

一方は高萱にして一かたの木立のなだれ粗くあらしも⑫

一本の竹にあつまる木枯のさむぎむとしてさ夜ふけにけり

一本の木立が日々の目に親しあるひは霧の向かうにありて③

いつか日はとつぷりと暮れてゐた、外に出て木洩れ灯に手を出す⑫

五日前敵機が過ぎし崎の上の木群がなかの諸鳥のこゑ③

一個づつ積まるる塀のブロックに隣家の梅の木がかくれゆく①

いつ咲きし柃ならむ掃き寄りて木蔭に花の散りゐるを見つ⑥

一山をおほふ木立に鳴き入るる鴉のあとに夕やみせまる②

いつしかに鉛みづぼそくなりゆけど木の下やみにしぶきあがれり

いつしかに木の葉おちつくし清崎の丘あらはにも見え透きにけり③

いつしかも檜の木立に平らなる流となりて砂地さへあり⑫

いつしかと春の過ぎゆくあととめて木蔭になづむ花の幾ひら

いづかたの花たちばなにふれつらむ木立ふきこす風かをるなり②

いづくとも見えざる林の木立よりここに散りけむ落葉いくひら②

いづくにか木の葉のけふる匂ひして眠りぬしゆゑさびしと思ふ②

何処へか去ぬる木の葉の足どりの世のたぐひなくたのしげに見ゆ②（は）

金子 薫 園

佐 野 四 郎

安 江 不 空

武 井 ひ ろ 子

行 田 雅 規

柴 田 倉 三

菊 池 知 勇

藤 森 朋 夫

山 下 陸 奥

塚 田 菁 紀

與 謝 野 寛

川 島 園 子

明 治 天 皇

正 岡 子 規

岡 本 大 無

前 田 夕 暮

前 田 夕 暮

長 沢 美 津

阪 倉 松 二 郎

斎 藤 茂 吉

河 野 慎 吾

横 田 専 一

前 田 夕 暮

山 下 陸 奥

久 保 井 信 夫

鈴 木 康 文

桐 田 露 村

斎 藤 茂 吉

相 馬 御 風

斎 藤 茂 吉

峯 村 国 一

明 治 天 皇

寺 沢 天 皇

偶 田 葉 吉

中 原 綾 子